9　分離的代数拡大

9.1　多項式の分離性

命題 9.1. 代数拡大 L/K について次は同値。

(1) L/K : 分離的。

(2) L/K の $^\forall$ 部分拡大 M/K は分離的。

Proof. 定義 (**??**) から明らか。 □

命題 9.2. $f \in K[X] - K$ について以下は同値。

(1) $(f, f') = 1$ ($\Leftrightarrow$ f とその形式微分 f'が互いに素)

(2) f の判別式 $\mathrm{disc}(f) \neq 0$ ($f = \prod_{i=1}^{n}(X - \alpha_i)$ のとき $\mathrm{dics}(f) := \prod_{i<j}(\alpha_i - \alpha_j)^2$と定義する)

(3) K のある拡大 L 上で f は相異なる一次式の積になる。

(4) f の任意の根は単根 (重解でない)

(5) $K[X]/(f)$ は etale$/K$ ($\Leftrightarrow$ K 上分離的)

Proof. (5) $\Leftrightarrow$ (1)

系 (**??**) で示した。

(2) $\Leftrightarrow$ (3) $\Leftrightarrow$ (4)

明らか。

(1) $\Rightarrow$ (2) ($\deg f > 1$ のときを考える) 対偶 $\mathrm{disc}(f) = 0 \Rightarrow (f, f') \neq 1$ を示す。

$\mathrm{dics}(f) = 0$ よりある $0 \leq i < j \leq n$ があり $\alpha_i = \alpha_j$ となる。$i = 1, j = 2$ としても一般性を失わない。これは f の根なので $f = (X - \alpha_1)^2 Q(X)$ となる $Q(X) \in K[X]$ が存在する。よって $f' = 2(X - \alpha_1)Q(X) + (X - \alpha_1)^2 Q'(X) = (X - \alpha_1)(2Q(X) + (X - \alpha_1)^2 Q'(X))$ となるから f, f' は共通の α_1 という根を持つので互いに素でないから $(f, f') \neq 1$ となる。

(2) $\Rightarrow$ (1) ($\deg f > 1$ のときを考える) 対偶 $(f, f') \neq 1 \Rightarrow \mathrm{disc}(f) = 0$ を示す。

$(f, f') \neq 1$ よりある α があってそれを $f = (X - \alpha)Q_1(X), f' = (X - \alpha)Q_2(X)$ として共通根として持つ。この二つから $f' = Q_1(X) + (X - \alpha)Q_1'(X) = (X - \alpha)Q_2(X)$ より $(X - \alpha)(Q_1'(X) - Q_2(X)) = Q_1(X)$ となるから $f = (X - \alpha)^2(Q_1'(X) - Q_2(X))$ より重根をもつ。したがって根の差の積である $\mathrm{disc}(f) = 0$ である。

$\deg f = 1$ のときは f の根は 0 より常に $\mathrm{disc}(f) = 0$ となるからこの命題には不適。 □

定義 9.3. これらが成り立つとき f を<u>分離的</u>という。

命題 9.4. 既約多項式 $f \in K[X]$ について次は同値。

(1) f は分離的。

(2) f は ($^\exists L$ に) 少なくとも一つの単根をもつ。

(3) $f' \neq 0$

(4) $\mathrm{char}(K) = 0$ か、または $\mathrm{char}(K) = p > 0$ で $f \notin K[X^p]$

Proof. (1) $\Rightarrow$ (2) は命題 (9.2) で示した。

(2) $\Rightarrow$ (3)

α を f の単根とする。$f'(\alpha)=0$ とすると命題 (9.2) の (2) $\Rightarrow$ (1) の証明より $f=(X-\alpha)^2Q(X)$ となるから α が単根に矛盾するので $f'(\alpha)\neq 0$ である。よって $f'\neq 0$

(3) $\Rightarrow$ (1)

体上の多項式より f を monic としてよい。α を f の任意の根とする。f が既約多項式で monic より f は最小多項式であるからその次数の最小性と $f'\neq 0$ より f' は多項式で $f'(\alpha)\neq 0$ であるから α は単根。これが任意の f の根について成り立つから f は分離的。

(3) $\Leftrightarrow$ (4)

$f=\sum_{i=0}^{n} a_i X^i \in K[X]$ について

$$\begin{aligned} f' &= \sum_{i=0}^{n} a_i i X^{i-1} = 0 \\ &\Leftrightarrow \begin{cases} a_1=\cdots=a_n=0 & (\mathrm{char}(K)=0) \\ a_i = 0\ (p\nmid i) & (\mathrm{char}(K)=p>0) \end{cases} \\ &\Leftrightarrow \begin{cases} f=a_0 & (\mathrm{char}(K)=0) \\ f=\sum a_{pk}X^{pk}\in K[X^p] & (\mathrm{char}(K)=p>0) \end{cases} \end{aligned}$$

より、 既約多項式は $f\in K[X]-K$ で否定を考えれば成立。 $\square$

系 9.5. 体 K について次は同値。

(1) K は完全体

(2) 任意の既約多項式 $f\in K[X]$ は分離的

((3)$^\forall L/K$: 代数拡大は分離的)

Proof. (1) $\Leftrightarrow$ (2) のみ示す。

$\mathrm{char}(K)=0$ のとき命題 (9.4) の (1) $\Leftrightarrow$ (4) から $^\forall$ 既約多項式 $f\in K[X]$ は分離的。

$\mathrm{char}(K)=p>0$ のとき

$$K \text{ が完全体} \Leftrightarrow {}^\forall f\in K[X^p]-K \text{ は可約}$$

を示す。これより、既約ならば $f\notin K[X^p]-K$ が言えて命題 (9.4) の (4) $\Leftrightarrow$ (1) より既約ならば分離的が言える。

($\Rightarrow$)

$f=\sum a_i X^{pi}\in K[X^p]-K$ で $K^p:=\{x^p|x\in K\}$ (p 乗元の集合) とする。K が完全体なので Frobenius が全射だから $K=K^p$ なので $^\forall a_i\in K$ に対して $^\exists b_i\in K, a_i=b_i^p\in K^p=K$ である。したがって $\mathrm{char}(K)=p>0$ に注意すれば $f=\sum b_i^p X^{pi}=(\sum b_i X^i)^p$ より $\sum b_i X^i\in K[X]$ で分解できるから f は可約。

($\Leftarrow$) 対偶の K : 非完全 $\Rightarrow$ $^\exists f\in K[X^p]-K$ は既約 を示す。

K : 非完全とする。このとき $K^p\neq K$ から $^\exists a\in K^\times - K^p$ が取れる。ここで $f=X^p 0 a\in K[X]$ は既約になる。

b を f の根 ($b^p=a$) とし、g を b の K 上の最小多項式とする。最小性から $g\mid f$ で $\mathrm{char}(K)=p>0$ より $f=(X-b)^p$ となるから $g=(X-b)^d$ ($d^e=p$) と書ける。$f=g^e$ の形になり、 p が素数から $d=p$ または $d=1$ になる。$d=1$ とすると $g\in K[X]$ より $b\in K$ であり、 $a=b^p\in K^p$ から $a\in K^\times - K^p$ に矛盾する。

よって $d=p$ で $f=g$ となるから f は既約。これより既約な $f \in K[K^p]-K$ が存在するので対偶が示された。 □

9.2 元の分離性

定義 9.6. L/K : 拡大としたとき、K 上代数的な元 $x \in L$ がK 上分離的とは $K(x)/K$ が分離的であること。